



ガイド

1115人の南京の学生が「高校生平和教室」に参加
国際博物館の日「なぜ彼女なのか——張純如氏と<南京の暴行:忘れられた大虐殺>」特別展が開幕
生涯に真実と平和を追求する学者・章開沅氏が逝去
南京大虐殺生存者の威振安氏、金同和氏が逝去

編者による言葉

親愛なる読者へ：

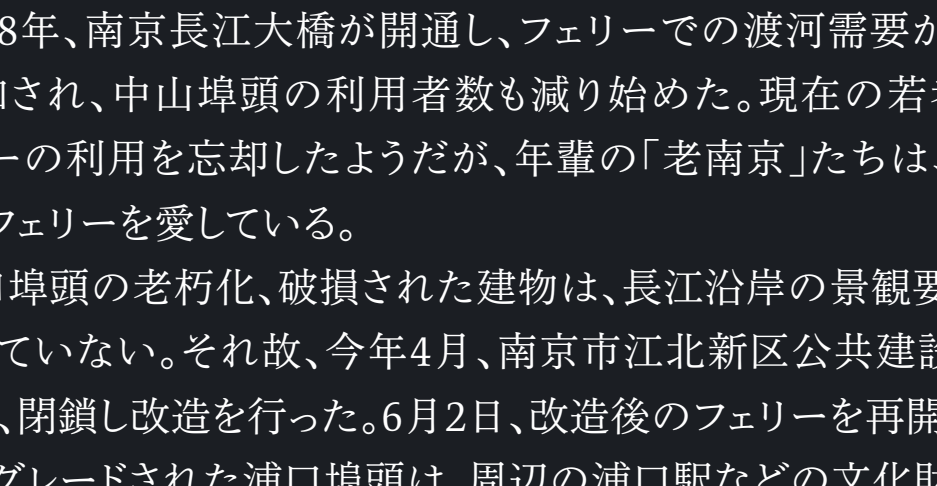
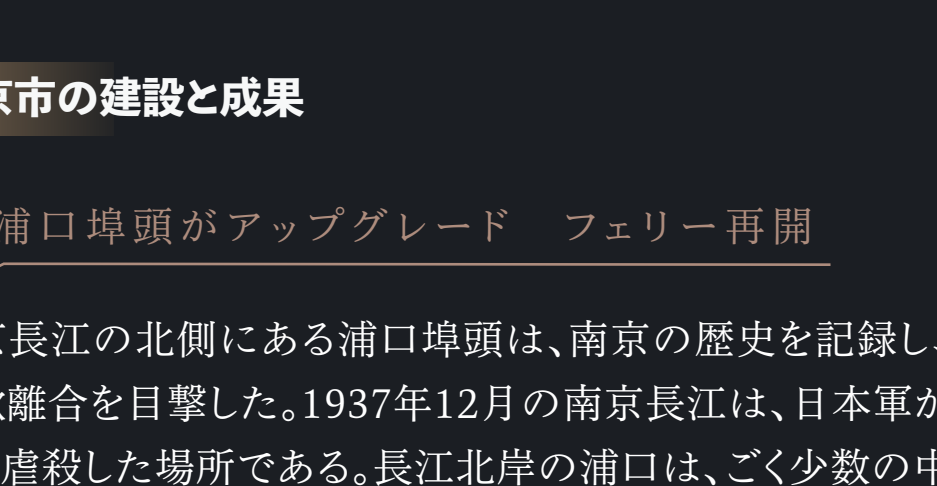
7月の南京は、真夏の時節に入りました。皆様が地球のどこにいても、私たちは、ここ南京から平和のメッセージをお伝えします。
では、今回の報道をご覧ください。

ヘッドラインニュース

1115人の南京の学生が「高校生平和教室」に参加

6月25日、記念館と南京市教育局との共催により行われた、「高校生平和教室」の2021年上半年期部分が終了した。全市19校から来た計1115人の留学予定者は、記念館で歴史と平和に関わる授業を受けた。彼らは、これから使命を担いながら、平和の種となり、世界各地に飛び立っていく。

学生たちは、いくつかのグループに分かれて授業に参加した。彼らは、記念館の公祭広場で平和大鐘を鳴らし、「南京大虐殺史実展」を見学し、犠牲者に菊の花を捧げ、平和を祈った。また、彼らは、記念館のスタッフと一緒に、折り紙で平和を象徴する紫金草の花を折り、南京大虐殺生存者が経験した話を聞いた。南京市の各中学校の歴史教師が、授業の講師を担当し、歴史と平和の授業を行った。見学が終わった後、記念館の張建軍館長は、「歴史を銘記し、平和を守り、民間の友好交流に貢献してほしい」と、学生たちに伝え、「平和の使者」の修了証書を授与した。



南京市の建設と成果

「南京浦口埠頭がアップグレード フェリー再開

南京長江の北側にある浦口埠頭は、南京の歴史を記録し、無数の悲歡離合を目撃した。1937年12月の南京長江は、日本軍が中国軍民を虐殺した場所である。長江北岸の浦口は、ごく少数の中国人が脱出できる場所であった。

1968年、南京長江大橋が開通し、フェリーでの渡河需要が大幅に緩和され、中山埠頭の利用者数も減り始めた。現在の若者は、フェリーの利用を忘却したようだが、年輩の「老南京」たちは、依然としてフェリーを愛している。

浦口埠頭の老朽化、破損された建物は、長江沿岸の景観要求に満たしていない。それ故、今年4月、南京市江北新区公共建設センターは、閉鎖し改造を行った。6月2日、改造後のフェリーを再開した。アップグレードされた浦口埠頭は、周辺の浦口駅などの文化財建築に相応しく、機能上も商業的施設とよりよく融合し、現代化された遊覧船埠頭となっている。

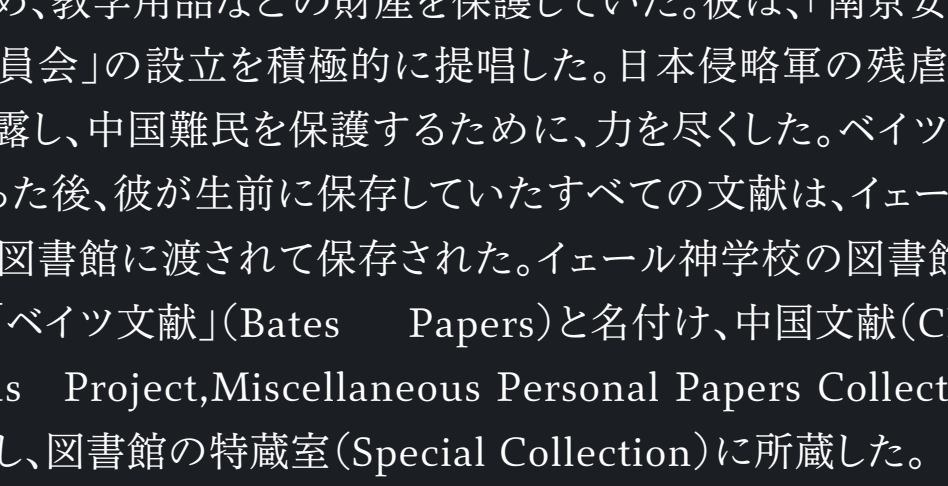
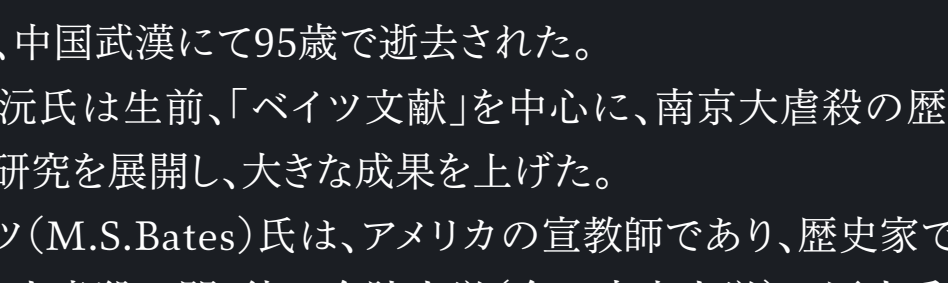


「ラーベの日記と平和都市」
オンライン国際科学的考察プロジェクトがスタート

6月16日午後、南京大学外国語学院が主催する、「ラーベの日記と平和都市」オンライン国際科学的考察プロジェクトが開始した。このプロジェクトは、南京大学平和学園連ユネスコチェア、南京大学ラーベと国際安全区記念館、ドイツフェヒタ大学とハイデルベルク大学の強力な支援のもとで開催された。

開幕式では、ドイツフェヒタ大学のEgon Spiegel教授が、ビデオ通話を通して、自らの平和学研究成果と結び付け、学生たちにドイツの平和学研究の状況を紹介した。そして、今回のプロジェクトの成功を祈った。

南京大学平和学園連ユネスコチェア・南京大学歴史学院の劉成教授は、学生たちと、「平和とは何か」について討論を展開した。彼は、「歴史を忘れることは裏切りであり、平和を追求することは、歴史に対する最高の記憶と修復である」と伝え、「平和のボランティア」の精神を共に学び、歴史を心に刻み、平和を大切にしよう呼びかけた。



記念館速報

「なぜ彼女なのか——張純如氏と<南京の暴行:忘れられた大虐殺>」特別展

5月18日の国際博物館の日、「なぜ彼女なのか——張純如氏と<南京大惨事:忘れられた大虐殺>」特別展が記念館にて開幕した。「至純至美」「至強至勇」「一人の力」という3つの内容で、張純如氏の30年余りの人生の軌跡を復元し、南京大虐殺の歴史を再現し、正義と平和を守る精神を明らかにした。

張純如氏は生前、強い使命感、責任感、正義感で、南京大虐殺を取材し、『南京の暴行:忘れられた大虐殺』という英語の著書を書いた。今回の展覧会では、張純如氏が生前に使用した物、また彼女と関係がある50点以上の物が展示された。そのうちの25点は、2000年12月に、張純如氏の母親である張盈盈氏が記念館に寄贈したものである。

今回の展覧会では、AI技術を利用して、張純如氏のイメージと音声を復元した。当時、張純如氏と一緒に南京大虐殺の生存者をインタビューした段月萍副館長、江蘇省行政学院の楊夏鳴教授、江蘇省社科院の王衛星研究員らが会場を訪れた。段月萍副館長は、「とても感心しました。彼女は若い生命をもって、世界の正義と平和のため大きな貢献をしました。」と述べた。



生涯に真実と平和を追求する学者・章開沅氏が逝去

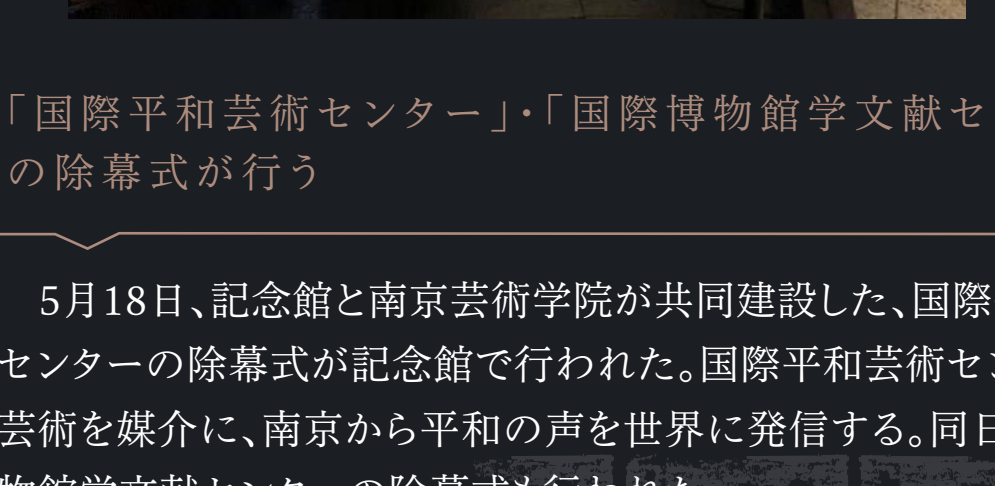
5月28日8時15分、国内外で著名な歴史家であり教育家の章開沅氏が、中国武漢にて95歳で逝去された。

章開沅氏は生前、「バイツ文獻」を中心に、南京大虐殺の歴史について研究を展開し、大きな成果を上げた。

バイツ(M.S.Bates)氏は、アメリカの宣教師であり、歴史家でもある。南京大虐殺の間、彼は金陵大学(今の南京大学)で歴史系の教授を務め、教学用品などの財産を保護していた。彼は、「南京安全区国際委員会」の設立を積極的に提唱した。日本侵略軍の残虐な行為を暴露し、中国難民を保護するために、力を尽くした。バイツ氏が亡くなった後、彼が生前に保存していたすべての文獻は、イェール神学校の図書館に渡されて保存された。イェール神学校の図書館は、それを「バイツ文獻」(Bates Papers)と名付け、中国文獻(China Records Project,Miscellaneous Personal Papers Collection)に分類し、図書館の特蔵室(Special Collection)に所蔵した。

1995年、章開沅教授の著書、『南京大虐殺の歴史的証言』と『南京:一九三七七年十二月から一九三八年五月』が相次いで出版され、南京大虐殺への世界の認識をより深めさせた。

章開沅教授は、何度も「われわれが恐怖と犯罪に満ちた過去を思い出すのは、決して復讐するためではなく、真理と正義を求めるためです。そして、同時に、歴史から経験を汲み取り、日本を含む全世界の人々が教訓を受けて、侵略戦争に反対し、世界の平和を守ってもらうためです。」と述べた。



南京大虐殺生存者の威振安氏、金同和氏が逝去

4月30日、南京大虐殺生存者の威振安氏が91歳で亡くなった。5月18日、南京大虐殺の生存者である金同和氏が92歳で亡くなった。現在存命中の南京大虐殺生存者はわずか66人です。

威振安氏は生前、「その時、日本の馬隊が私たちに迫りつきました。ある日本兵が姉を強姦しようとした。彼は、馬をつなぐロープを私に縛り付け、姉のズボンを脱がせに行きました。姉は泣きながら助けを呼んでいました。おばさんは、傘を支えて姉の顔にかぶせて日本兵を見せないようにしました。そして、傘が開く瞬間、馬はその音で驚いて、日本兵を引きずり出して遠くへ逃げました。助かった私たちはひざまずいて神様に感謝しました。」と語った。

金同和氏は生前、「その時、私はまだ8歳で、父は日本軍に殺されました。家族は老人と子供ばかりで、これからどうやって生活すればいいのでしょうか。後は、母が小商いをして、途方に暮れた一家を養ってくれました。」と自分の経験を振り返った。

家や国の記憶から世界の記憶になり
「南京大虐殺資料」と触れ合う

6月9日の国際資料日、記念館は「ファイルの壁」の前に生け花の形で資料を閲覧出来る装置を設け、貴重な「南京大虐殺資料」から4点を選び、見学者と至近距離で触れ合うことになる。



「国際平和芸術センター」・「国際博物館学文献センター」の除幕式が行う

5月18日、記念館と南京芸術学院が共同建設した、国際平和芸術センターの除幕式が記念館で行われた。国際平和芸術センターは、芸術を媒介に、南京から平和の声を世界に発信する。同日、国際博物館学文献センターの除幕式も行われた。